風俗文選　賦譜　三

911.3
フ
3

蓑虫説　素堂
柴賣説　凡兆
閉関説　芭蕉
師説　許六
名阿段説　許六
出女説　木導
雑説　不知作者
愛猴説　万子
艸字藤説　朱廸
草苅説　露川
山芋説　晋仲
嘲霄感説　毛紈

風俗文選巻之四

五老井　許六　選

説類

蓑虫説

素堂

○みのむし〳〵声のおぼつかなきをあはれぶ。ちゝよ〳〵となくは孝に専なるものか。いかに伝へて鬼の子なるらん。清女が筆のさがなしや。よし鬼なりとも瞽叟を父として舜あり。汝はむしの舜ならんか。

〽みの虫〳〵声のおぼつかなくて、かつ無能なるをあはれぶ。松虫は声の美なるが為に籠中に花野をなき、桑子は絲を吐により、からうじて賤の手に死す。

〽みのむし〳〵無能にして静なるをあはれぶ。胡蝶は

花よりはなへうつりて蜂は蜜(ミツ)をいとなむよふは淡きわざかや。なるほど誰がためにか物をあやつりけるや。

この虫は、からものゝかなる(スワギ)を嫌(アハレ)ひ、一滴をいむ。まいてもろみとりは、一葉をもかまいてれおすこしを、なす物つまり懇地ありけるかひある也。おほくは人のなさけ多からずして、そこなふ忘りしめがすこしもまなることなりし也。

簑虫は、漁父が一葉を身にかけさる。ねかふ回し。漁父は魚をもよしまさそ。風波に魚へども、浅に水を死をとし。酒にあそひとしるなる。たゞすら文王を釣(ズル)乃識(シンサツ)あるを、子陵も漢王よ一味の叔宗をさやうにけり。

みのむしは至法にほ維ぬくしたる田(タエ)簑は縫のなう、かの物をや。山まらされ誰かはしらずとひやかしんかなるとも、まるく去りけれど、魚を見て深く入。漁父は簑をも着かはしも、ふみのはまてを物にてれざる也。

簑虫し。翁を柳につきそめしより、桜が花(ナリ)ますかげて、家康の心を起し、嫁を荻に風よりとそへて、孫まで風をまとふひまなかりしのほそさ。空(ウツ)蝉(セミ)よ身をなぞらよ、骸(カラ)も躬(ミ)もまよまつるや。

又以男文字述古風

簑虫　落入聰中　一絲欲絶
寸心共空　似寄居状　無蜘蛛工
白露半白　青苔粧躬　從容侵雨

飄然乗風　栖鴉莫啄　家童勿蔑
天許作隠　我憐称翁　脱蓑衣去
誰識其終

柴賣説

凡兆

柴賣は来らうはず。小野。細河。くらまなる雄賤あれ其賈
小原て花空を梅ヶ細より先おりし。涼山紫手れが庵よ
折ゝくといへるあるぞまとめるあゝわおる宰となしんかの春
の毛女が買よ似て。河陽の焦子が仁にもあしまど。唯世語
里のよひめして。女を哉よおくこ衣を蒙て山よ入
くこ袖をを樵る。昼に日の暇せすとも是く。足て流に漱

まことも白しさんがよ英花門院の女房。阿波乃典侍の局
などいふ人乃名おおるうやあきひくべくに番おるよ
衿をはくろん緒して二布をあらりし。何きよわゐほいし
古縁きはふき。何も塗ようにおよそすゝまくうしい
むすびさ垂乗男乃んは紐二脚をまさる纏踯を戴
ゆの葉も虎杖をふるげ。もりさるしの山ばふらしね
左乃にほど一里二里とはくる二里よあるりて肩せる
業もなくいの侍る睡をもかまれ。衛家の町よ
ちかけしまへ。母乃おもちぎりて大路小路よもよ
武らかおかしで門をも見。あるあいは出口乃市・よ来を
ちかぐへく。ぱ鈴の首をも涼。月乃夕をつまよ物を

ていねぶの西をながめて、川のいふ流まいつて失
とゞめるをさゞにあらざる東坡が翁の笑ひし四方に
あやしき紅へで、霍女もかほまうらひ、しいんらん魂をえ
へて、傾城も手うすうじやうたがへし。西施が娥眉をなさしめて
いかなるごとをなじとて、しらぬすへては、花たれるなかりし捨て
ざりける。

閉関説

芭蕉翁

○色ハ君子乃にくむ所にして、佛も五戒乃はじめに置り
といへども、さすがに捨がたき情乃あやにくにあはれ
なるかた〴〵もおほかるべし。人志れぬくらぶ山の梅
下ぶしに、おもひの外乃匂ひにしみて、忍ぶの岡の人め乃
関も守る人なくば、いかなる過ちをか仕出てむ。あまの
子の波の枕に袖志ほれて、家をうり身をうしなふため
しもおほかれど、老の身乃行末をむさぼり、米銭の中
に魂をくるしめて、物の情をわきまへざるにはるかにまし
て罪ゆるしぬべく、人生七十を稀なりとして、身を盛
なる事ハわづかに二十余年也。はじめの老の来る事
一夜の夢のごとし。五十年六十年のよはひかたぶく
より、あさましうくづほれて、宵寝がちに朝起したる
寝覚の分別、なに事をかむさぼる。おろかなる者は思
ふ事おほし。煩悩増長して一芸すぐるゝものは是非

乃勝(スグ)るゝのみ也。是をもつて世におゐてしかるに爰にあつて貪欲

に魔界に心を怒(イカラ)し、溝(コウ)泣(ダ)に身をやつし、生死の安否

流し、蘭華老仏の唯利害を彼許し、老若をえらばず

まで聞にあらむしても老の業といふべきにあらず。人は常に

乃余あり。出る人は他の中に業をすゝむるにあらずといふとし

ある教(ヲシヘ)の人を閉て、杜の所が門を鎖(トザ)さしむ。よく成る者を

なすとし、貪(ムサボ)りを富(トミ)ましむ。五十年を顧(カヘリミ)ず、自書(カ)く所

このしも禁戒となれ。

紹の師也、鹿を鎖すによる門の埴

師説

許六

それ人学ぶ事あらば必師あり。師とは道とは伝へ業を受

惑(マドヒ)を解(ト)くものなり。しかれども生れながらにして是を知る

者にしてなし。しかして吾より先に生れて道を聞く事

ときは我是に従て師とす。何ぞ唯一の師

ありて道を教る事退きがたきにあらず。むかしを尊る事は

乃法にわかつ西行といふ者あり。神仏を問に

ら仏法を用てよさらむ所して和歌の流儀を学ぶ

果て廻りして大黒どのを崇め先、神を出をむろん

ちごの所摘に志の人のまりしをもつて和歌に

道の説にしくる土にしてなりし出家世佛者乃師たる人をば
云へるは。大臓に門をし披て。讃歎を守て貴賤を西方利
益を説て宗旨を奪ふを。元来世にかる名をと見えず。
批にならひて出世家にまかりかかる人あるハ我意の乃
渕流にかゝわり。出家をとも衰田をとら乎架てる。紛れなるよ
人又さるこあはしの子在り輪番乃かも。父母に差つけ
又は伝来監寺ならでもわりにもすまして利益し。出家は法師が
すぶらしを捨てる。是らも見ハかゝる源を残る事かれども
志しなれども淋にふ落し。何某寺が新發意といふ
なる者もまかりと称もいかし人乃師道に兼かけれども世を添る
皇子きらせハ歌舞楽師。百工乃師を挑むるものかかるぞ。

又ちとら馬丘形の系。諸禮儀。諸芸。謡者の謡乃師たる人
みだりに世ぬ範つきにくとうしなれ。此伏乃師をも大事とする。
あら貴子を強力と名付。法華花乃師さるるもあれど。お寂もあ
かひてかくせる貴子を芸かことハいかなれ。俘權富士乃神禰儀の
人を淵師ともふさハとするにへもまかるもとも。達道真業を
教へべく。仁二にもちらしとハ芸べども。我が藝の外の稀を感し
てさ二乗者の使を絡る事。無量乃金表がへ乃新紺
もう治さこるを。翁乃擂鉢附を老へ和合ん乃悪さなる
蓋を儒しわさるゝ世の風俗にして。教ゆる人もまねぬるぞ。
ましてれる人も祈ぬるまるかなし。こて小眺諸の浙之
事。角の浪老人よれなどして角安宗をまするとなれ。花の本

をこそ継これを天下にも宗匠といふなれ。それより厨子
小路の其角の看板をうけてあやしき道を説て宗
匠めくを然して一庭一風の宗匠にして真の花のもと
をへたる師芭蕉翁ひとり泰甲よりも世帯く
道を受つぎひとを解。これを其宗匠といふなれ。
今乃そんゝ人を見るに一生師をも拵ぬ人をかたらず足
取もせずも乃人真似して翁の人を其やうにわが俳諧にひとわ
惑ひ上ゆ大事を志らざ。人ハせまきおもしろさにあり。
師にまつらひて惑を解師の説にもよる人を自己の
善悪を寛容するを志らざるもの師の弟子となりて才をも鍛
二とせ乃道をへねまじと師につき修業にあるも十年をかけて
やうやく師の宗匠を継十哲乃内入にも許して宗匠より
血脈道統の書をとぞ。法の宗匠乃宗匠にかゝるといふさ称真の
風流あるものを志るとぞ。今の人の俳諧を志ると称もいに
先其所乃ありさまを見るべし。其乃俳諧一人なれど
一流すべて道に迷ひけむ称言下に惑を解てあるを
ふ悔しきをたとへ強なれ爰にする孟遠家に志る
ゞいて人をはかるべし。是迄我が身につるが代。
沈痾老衰乃床にねやみて足とどまる者の稀
今の道の為に師の説継つて遠くがたるも其が俳諧の
たとへ是を知て気のつくがいの事を知るに深く
すすめて務荒れ眼の庵乃師ありて其ときゝ宗

かへてかくおもへかりべし。

名ハ阿段ニ訛ル　許六

○唐土の事はあとつきて。文字の唱を略しけるを社
李斯が名を称しいはんなれど。通字ありて己の
上もよりしもまで称バなくても事ハ欠まじくや。
名聞の為に世なりしバ。一世もなかりし。されバ俳諧
にて風流もせんに。風雅摘よ俗をとかしねする也。
あかりこし或名聞ハ。あしくもや。さるを今乃人。名を
天地はかしかつまき乎きるとおもへる。ことそれし。
まつ名を揚ろ事見えん。阿自をや聞ろさけ。異

乃くつまきも呼へきんとハ人をる。数識と乃。類家の名。
鉄幽敵とはめいてもねまバ。禅師乃号。大乗一流一派の
名聞あるまて乃ほとし乃人の名ハくらけ。深き心なし。
歎を殺して。弟子乃名とし。白道を好くみ名を
定む。是ハか一身字のつるよ。ぬりを必ずしくめ。天命
瑞乃類も。漸こそくあれ。一笑志計もあやめるよ清き
かくし。小坊主阿段よく葉をとむ。本が濁と見ぬむる。
杜子が猿奴を第しき称バ。名ハ佐諺ハくされて、
かまはこまハーノするまかく称でし。

出女説

本喬

〇傾城傾城とは、唐人乃いひまはしにて、白拍子か
袖乃せき、かゝ歌乃やはらかなるべし。首よりは頼み
すまひ、かそふよいと西なりけん。出し乃名目、当世の洒落
柄杓。千鳥。向人、中宿乃さらい、大むすめ一種よりわかく
位階の二つ下、今頃のお職なるべし。それとはいへど
して、静様よゆるされ、貴人のかたいはんにもあらし
也。かゞ子細もて、おほくは、ふるさと小萩そわ、旅ゆく道人
がるも我、延君あれて、旅人乃魂をとらんと気の
きうらんましてみ許しむ程の意ともなしとぞ知らし

酒乃さかな進退のやまれずかゝりて、わが国津乃
姿をあらはし、慈悲心第一乃おせいにもまさる傍生
達のあれさまとする小娘をさし旅、旅人乃宿とて
さく、女郎花のさくひもありて、ご游の勝乃秋
旅まを落さむとし、あるは翁立乃旅人と送て、打笑
姿とやさしく、はなを飛し、鄙やかにちらしひ
きてとわやへ衣とりつぎ、赤家の姦のさめ時に、膳の
独鈷を相当とおもへる。ござる足労の塗膳にすわらかう
通ひけるも云葉をかはし、中々豆乃日さし、それ
やうやくや、又世乃正面に座を定め、泊りて旅人に
女肌ぬぎて乃大ざつひ、首筋のあたりより、燕ばかり成る

まで景気よろし。目さむる心地ハせられけれ。これの所にて此
うちにてハ。おもしろき竪(タテ)幣に。京様の常に見なれたる鳥(上)
の舞下にて。まじき斎王あり。門の様にうちならべたるは。かまどの下
世の勢ひなるべし。いかなる人かやどりて。いかなる此仕合
まゐらんもしらねど。我も一しほあはれなる人のこころあはれは
まじき野中川にてまなぶるまじる同じ心の奥(キヤウ)のねさつけ
いへ。陰姿の手拍子に軽忽(キヤウコツ)の舞を上ぐ。夜半
までこそ。酒火かよはせて。指(ユビ)をそのはなはだぬるを
なるべし。青夫に塗籠(ヌリゴメ)をりつらて。岩間には檜(ハダ)
て飛。御便(ゴヘ)。器濃の金盥もむりしてなれば果(ハテ)。班女閨(ネヤ)
うをだされけるぞ。これわたもなし。とりなしの風情。

月影の浦の吟も。此君にあはぬうらみをいひ。一しほ
お泊に。宿かさぬ君もなくなりて。今は世の中の不
なりしね。伊勢路の彩色(サイシキ)ハあらぬかぢうしそ。大津草ぼ
ゆかしうれ候べし。名所のまじりたる此ハ川と
なくよりて果なく。鼻の下の煤竹(スヽケ)も古く。本郷
の小車にて寛も。さびしく暮て。のの風呂の火影(ホカゲ)にたゞ
鐵(ヅ)さまざまも侘し。行田舎ハ清水ひさびしく。表向(ツモテムキ)ハ
勤(ツトメ)もせで。神ともあはぬ旅なるうらはんなりけれども。なつかし。
夜は更て亭主はつれゝね。遊びもたのしやら書院
床の小障子にかきて。神の瑞籬(イガキ)もちかうなりて
大殿(オホトノ)にとりて。一夜の枕をかりて。此所は。尋ねて昔

を定め。給分の加増ハ末々が家をこぎ候。拙者皆給て望
む。古迹も鳶(トビ)にハなりきて。以来の行末何ようなるん
蒼ハ善賢ぼさつもなれる。先例もあまた。今
やすらしき通ひありて。果ハ加賀(カガ)龍脚(カキ)乃書よ[illegible]
痩子(ヤセゴ)ある[illegible]粧間鍋乃君に饒(ウヘ)く。生涯を終る。
あまたとでも覚束なし。絹屋(ユヤ)の地獄まではあまたと。
若女乃地獄の沙汰てきく。其てハ古地獄の門へ。
まいりも。又あり給はなるべし。

雜説

不知作者

○人物禽獣ハ。もと人物禽獣の精なるもの例
山川草木ハ。もと山川草木のもとなる所にかゆ
物皆それが為のしみ乃縁(ワガカ)なる所に。身に縁果るも有
なるもなるべし。[illegible]程(ドン)ハ安楽に住まし。仲尼ハ
仁義によるある。荘老ハ虚玄(ゲン)に身を置。神仙ハ霊異(レイイ)に
倒る。伯夷叔斉ハ貫によまるる。楠正成ハ忠に倒る。
此らハあつきよりたゞに行。我ハひとしがたなるふゆるか。[illegible]
てあまた行に名をふ行。髑髏(トコロ)ハおが身ようなる。長ハおが紀ま
るふまし。結ることもがり絶に倒る。さゝ樵ハ瘡(カサ)をぬふ人
て痒(カユ)かり[illegible]ハ[illegible]るよしみ。貪(トン)をくらむにもれ。
盗賊の[illegible]をかるもとを[illegible]。忠臣皆和漢人情の語く

すいざうにかゝる事もあるべからず。菊よりも風雅に係
る人おほよそ十か中に。菊は只花に係るまで。実は紙を連ぬるに
為にあり。是は牡丹にも蘭にも似ず。さらばひとり花に紙て[illegible]を
継る。其門葉にあまたの弁は。其ふところ[illegible]申しつゝも。
武乃松風を耳のよそにきゝよく、ふつく微細の論を
こそさゝ[illegible]。二千余年ほどを流れしつ。時を済れ
流の言葉をとゝ。風雅の所出に為に和て古風桃李花
乃開る候日然となりも。其関を悩に為にまし。又考ふ隠
にもあらず。涼しきは、ふたりの言ふものにも伝まし。霧降川ハ
眺望の殺によいもの河。其和表序ハ風雅のつよきに
和漢千歳を其世ハ風律の清さとさふるよ為ふる風流
漢倉乃月よそふまで妙を松竹乃閑寂にまさる
松は又横にそふまで。唯雅ハふるきをうたふ。菊の[illegible]
梅の魂ハ句に伝まし。許六も文集の文に伝ふ。さ秋も
芭蕉流に伝へつらねあまたヽ。是流をそふるを人も
おろそかに。常に附るに伝まし。桜をも家にそふ為へ
世人によふもの1つきぞ。遊ぶこそ人に伝ふへきをかたる

愛梅説

全篇説梅而無梅字。終句以二梅字結之

万子

○鄭原楚辞にまとまる。葛山宮宰府に揺く。西の對
乃おびろ秋に。遊月ひとり坐から孤山のたそれ

す。珠瑛瑶謝をさらはせて。山路の露ほしかゞやかにさし
わたる。故に陶氏の自ら隠逸の名をあらはせり。谷の流に寿をうく
る事あれバ。衍乃虚枯なるがちかくなるゆへ。神仙もかくこそ賞び
す。月に白衣の天気酔客するに投て。酒家乃樹とも曝
きの名に籬菊をうらる。紺珠の霊乃中に。紅緑芽乃枝
に自ハとゞむ。遍照が折髪。宮居の笄。有紺珠十粉
盤乃粒。磐。深き尾の汁。こも皆かまびすし。風流風情の
まじりの謂ばなるべし。彼説に云る。牡丹ハ花の富貴
なるもの也。菊ハ花の隠逸なるもの也と。是その
ふかきはしてしたへる人にまれて。蓮ハ君子
なるものにして。そのしかまはかやしちりて
とどくしも梅ハ花乃風雅をむねとすれバ。その風雅を
むねとせる事を乱さる名なり。

艸字藤説

五老井四絶之一

程己

藤ハ宿る所をえて大和誹諧也。実となりてハ誹諧乃
かゝるにもあらぬ神に手折て簪にかざらハ。大津絵の
風流なるべし。高松に倚掛して。倚扇乃ためにす
ひさし梅乃倚にまつはれバ。甦て斧をとゞまづらひも
なし。藤の性酒をこのむ。山王常に錦を乗しむ
何の因ありてか。かく錦にとハおもへぞ。

草にも花ありて。花の中より下りしなるべし。〇槐杯にお枝八
色々むらさき穂々き鮮のうちもあやかし。主人さゞわを
喰らるよし。富ぞざ也してぞうしやまれる。

折蓬(カギ)てし帽乃かざしや花乃也

露川

草苅ノ説

〇松の葉のきハ言になれバ賞しきありあかしぞそも親のまれ
しきことすぢそ子ハつぐまじ若くておりしかるぞ。なる書く
子乃いらる穂ハ。親もなく兄弟もなく。ひげさへなく。
いつてよハ海らん。さて波や葉は乃杵みなのるけ
しぐらかささし見事ハ時々やさし。絶乃ノ子がかたなし之
なるべし。山草苅ても。篭の牟人させてよ半まで家さて
おほくの穂。其八ありけ乃ごんでも少々と涼しく。百合風味
苅入らく。結縛(ギス)のおゝく喧也もあるべし。秋さてむらの
さもあへぞ。花々きいそぎ。花ひつまじ芋らる。戻まくし胡
て又おうし。稔麻ゑかくる事しきありて。坂ハ日おち帰
而かりるべし。

草苅乃花くとぼれ野菊かな

吾仲

山芋ノ説

〇草に穀穂まさぬ山中に生まると山芋と呼し。自
然生とも称して山葉に用也。畑に植てまつゞせとなるを

はく孫と呼て。其功もすくれたる味も次也。秦攘よ
そ王延といひ。鄭越にハ土苗と号す。杜詩叢中の注を
こゝろミるに。陳尚が所ハ都延の賦似たり。蒲山の蓼菊ハ千
里旅ゆるまじき也を変ぜん。あらまことの事ハなきを
子藕乃ごとし。やうやう東を生じ。細なる子を作ふ
ぬるごとにいふ物て。庭禅室に入る物。いもがもとふ種
と見よし。数閑に頌る。ごまかの麻酒にハ漢肩山の
事をすわ迦。和尚の麦飯にハまわまれ宿乃ところ
こともやむ世に浮菜ともてをやさる物じ。旁信の為ま
かまつり済。人ハ参よく人を活しよく人を殺と頼

嘲雷月感説

毛抗

一 蛤乃上の喜ハ物をしらぬ人ハ入麹をとこみに茶を尚し
まる人ハ。庵様の出をすく風雅のうけハいふとまるお
遠ひなれ。かの人生に行をえば睡蛍にかきこゆ麻
はるを楽乃元上とするに麻酒さめ暮虫くひ
と氏孫ハ是とも。夜の明るまでもなく。屋着議の
物茶毎月も仕あふ。太平を領じ治めむとおもへバ。言下
治ても又今持の浜人とかわて。浜海の奥よりこゝ
私藪頭陀よ人を褒して。杜詩家酒に身をまん

觧

されど縄にかゝる危さんを離れし。紙張紙にすゝりぬき所
心地せられて、世にも奥画ぬき風し、庵中の秋あり
て。青銅を捨てさしぬれど、さ稚。大欠に鳥籠(カゴ)をつくりし。四隣
の侍るを待りて、旅人の釈迦にあひられて、祭風雅に翁を
仕(ツカ)をとかつる人、その一ぬと、いふ事を知るぞ短き慶世一八虚
風の模様とおぼへ。花鳥風月は実にも心としぞりも高く流
宰相が吾宗も。夜ふりあてに紙つくりし。むかし乃妙
を宗らといへる。世によくあれ。人生七十今時はいまれ。自から
五十七死とうあとしも。百歳の無寿には去られべし。吾あらく
霧鴫(ヒシギ)は春に住みる秋と、夜(ヨ)ばる情(ヨタカ)は細ふかくてつとふ家
[illegible]ふたりなりせましと[illegible]しかり[illegible]れ。

五老井許六選

解類

獲麟解　許六

○魯乃哀公ハ十四年。西にハ狩よ麟をとらへられ孔子大きになげきたまひて。春秋をとゞむ。史麟ハいづれの時にても孔子ちゑ聖人の出に出べし。乱ハ愚にして大経の本をさけて。命をまもれり。麟ハ四霊乃随一にして。狩する手をおそるゝぞ。つゝしみ給ふへかならずも又出ずべし。孔子これを聖よみいづれ。ましや牛馬の生れそこなひにてやあらましかバ。孔子も又出ずべし。麟ハ世。道おこなはれざる哉なし。道に麟ハのこあらで。聖人の上にハなきものやらん

獲麟解　解　許六

藪醫者解　汶村

長雪隠解　許六

又いづくし。麟ほろふまへ。聖人も出ようせまし例にても
あるや。為とし聖人ハ世のふ例おわとしも。道ハおさしめ
有きね。是しそもなきくよ為もしぞ。儒道をよふくしと
おりふしこれハ。麒麟をまつりふしひてハ聖人とあがむ
べきくや。異物ノきバ釈ハ教き。楞の豊鬼まバ子ハ別にて
占とそ。意業のこれハぬらく出しめつて。着おくて每よ
釈もちえなき聖ぞ。楞香厳鬼紀きらひおつみを出くまても
なし。さ教バ仁義乃占よしおハぬ為めしも家ぬぬべし。
麟をすりぬ所、人もあわや。又聖人をぬぬ。麟鳳もあわ
や。むかし二冊と不帯あもん集紀み於お。出来ん二聖人。
加かも神代より今つゞく当時石をば也しきもゆ

物ならぬ麟鳳。おほかた政にもならし大かたなものか
鶏ハ時を執ぎ。麟出く人もおとなし恐。風俗て族害
乃為を破る能なし。おぬ方の聖人よく固わるお
めべし。是ぬ庸去乃為も編しど。徹去紀があやまわるる
そりしおぬまをよくそくるや。世间を人とそるら恐して
麟鳳よのを同とつきて末乃見史の不同利ハかの一意
しておやまわらんで聖人ならしとおのよなるべし。今は麟を解
してかくるおさかな乗もる春秋のよきき傷わにやおやる
句乃戯向とし是こそかしらるハ何乃麒麟もりはれ
乃長くくらむや。

長雪隠解　　許六

○千藝の達人ハ。術藝に上手と評され。名字おこる人も。
神農の争ひを下ぬ。畢竟子書ハ四五に一藝とハ称
じける。此藝ハ殊に風流の人にあらざらん下藝、
つきさけとも。一藝一術ありて。万能一藝にかへざる
ゆへん、さ洗ば甲斐乃名物の分別しかよ定めがたし。又
隠逸を恐し。森栄鬼がきざる稽かざるは。
信長公も藝者とて人とされ。作事連枝乃名句しば
私しわ悉帯し。大便十八度も。此家に入て工夫と擬めぬ。

鷹乃編同とまれ日取まで。人に入に汲てさかも
紙帯に隠居ありといへるかぬ。往に此木乃すかわ。世播
不用乃いよ当たる者ども。志つくる同閑するハ下総を
解て公役と許され。此同居に入て終と遂させす
寂寞と楽まもと。屁とゆつかて在候。

何おもふ中に雪隠乃きず園

藪醫者解　　汝村

○世に藪醫とハ何とぞする。本名竹醫乃称らしや今又
下ものとにハあらざいつもの評ゆる何がしの医者。但
列奏又と以子不に隠まて。病藤を目どこし。死を記

壁よ迦ふこゝを去すくれしぞ。さ統ハ風を吉くハ
甚業と聖ふ書。律し酒しまゝびらしやふらん
出へぞ。痴密も信をまし。其の力も飛がたし。それより物
換骨奪胎して今ハ長物も古屋となりし茜丈ハ蕭
茜となり。当時の新造をとんろふせん門口に座位の
駕子ふ駈を附らし。竹格子よ賣薬乃看板とかく
冬守の待ても。中ハ九ふかさうの薬れを祀りて
薬店よえ志らせ。物中ハ澄産の内よ蒼て女房の新
とつび。御役ふ八宰舎を療じ。薬代よめでし。何の器出
ふ乃く髯膝ハ牛乃膝を君子。鶴乱し鶴の志う

裏へし果て何で村乃庄場の内をすれし。家徘徊
のみをとて之統を柳ゞ〆説もいよゝ統し々
こと得御を出しなから。字近め々代ゝ出ふ今くや
海し仰倭ちやめんの。安危の中もおかけりくい
継夜お蒙廷のさとうてその拂ふもん伴客統ぞ
佛法よハ薬毒の亂遣ふされハ。さりとて統へし
忍らぬ義豎子乃中ぶりてふ。文わる所のすちなき
なりむとう御さ々統。

記

落柿舎記　去来
幻住菴記　芭蕉
十八楼記　芭蕉
五老井記　許六
九華亭記　汶村
琵琶亭記　許六
風臺水臺記　許六
附紀行
鹿嶋紀行　芭蕉
南行紀　李由　許六

風俗文選巻之五

五老井許六選

○記類

落柿舎記　去来

○嵯峨にひとつの古家侍るそのほとりに柿の木四十本
あり五とせ六とせ経ぬれどこのみも持来らず代がゆる
わざもきかねばもし雨風に落されなば王祥が志にも
はぢよ若鳥にとられなば天乃帝のめぐみもうすからんと
屋敷もる人を常はいどみのゝしりけり。
ことし八月の末かしこにいたりぬ。折ふしみやこより
商人の来り立木にかい求めんと一貫文さし出し

侘びかつらね。其ハ瓢をさふらふものがゝらくと
風雅もしはまひしくと庭はつかて艶なる梅
もやふこれがまじハ高人のつみ業もありけるに
ぬ。まむしは髪乃ひかれ。白髪生ずるまで山守を業とし
ぬるよしかくぞうわ落ぬる椋をうくれ。いさゝかの價ゆへし
ふれそびてむや。竹にいと便なき物がゆゑし。中わなく備
乃かきつ夜さちの汁ハ消息遺るとぞ。三川から落椋
今の至来と書きて給ふかわ。

椋ぬしや木をのぼちうらあらし山

幻住庵記

芭蕉翁

石山乃奥。岩間のうしろに山あり。国分山と云ふ。そのかみ国分寺乃名を伝ふなるべし。麓に細き流を渡りて。翠微に登る事。三曲二百歩にして八幡宮たゝせ玉ふ。神体ハ弥陀乃尊像とかや。唯一の家にハ甚忌なる事を。両部光を和げ。利益の塵を同じうし玉ふも又尊し。日比ハ人乃詣ざりけれバ。いとゞ神さび。物しづかなる傍に。住捨し草の戸あり。よもぎ根笹軒をかこみ。屋ねもり壁落て狐狸ふしどを得たり。幻住庵と云ふ。あるじ

乃僧何がしハ勇士菅沼氏曲翠子の伯父よなん侍りし
を。今ハ八年ばかりむかしよなりて正よ幻住老人の
名をのミのこせり。予又市中をさる事十年ばかりよ
して五十年やゝちかき身ハ蓑虫のミのをうしなひ。
蝸牛家を離れて。奥羽象潟の暑き日に面をこが
し。高すなごあゆみくるしき北海の荒磯よきびすを
破りて。今歳湖水の波よたゞよふ鳰の浮巣の流
とゞまるべき蘆の一本の陰たのもしく。
軒端茨あらため。垣ね結そへなどして卯月の初
いとかりそめに入し山のやがて出じとさへおもひ
そみぬ。さすがに春の名残も遠からず。つゝじ咲残り

山藤松にかゝりて時鳥しば/\過る程宿かし鳥の
便さへあるを。木つゝきのつゝくともいとはじなど
そゞろに興じて。魂呉楚東南よはしり。身ハ瀟湘洞
庭に立つ。山ハ未申にそばだち。人家よきほどに隔り
南薫峰よりおろし。北風海を浸して涼し。
日枝の山。比良の高根より。辛崎の松ハ霞こめて。
城あり。橋あり。釣たるゝ舟あり。笠とりにかよふ
木樵の声。麓の小田に早苗とる歌。蛍飛かふ夕闇
の空に水鶏のたゝく音。美景物としてたらずといふ事
なし。中にも三上山ハ士峰の俤にかよひて武
蔵野のふるきすミかもおもひ出られ田上山に古

人をかふさゝかず。千丈が峯。袴腰といふ山あり。黒津の里はいとくろう茂りて、網代守るにぞとよみけむ、万葉集の姿なりけり。猶眺望くまなからむと、後の峰に這のぼり、松の棚作、藁の円座を敷て、猿の腰掛と名付。彼海棠に巣をいとなび、主簿峰に庵を結べる王翁・徐佺が徒にはあらず。唯睡癖山民となりて、孱顔に足をなげ出し、空山に虱を捫て座す。たまたま心まめなる時は、谷の清水を汲て自炊ぐ。とくとくの雫を侘て、一炉の備へいとかろし。はたむかし住けむ人の、いと心高く住なし侍りて、たくみ置る物ずきもなし。持仏一間を隔て、夜の物おさむべき所などいさゝかしつらへり。さるを筑紫高良山の僧正は、加茂の甲斐何がしが厳子にて、此たび洛にのぼりいまそかりけるを、ある人をして額を乞。いとやすくと筆を染て、幻住菴の三字を送らる。頓て草庵の記念となしぬ。すべて山居といひ、旅寝といひ、さる器たくはふべくもなし。木曽の檜笠、越の菅蓑計、枕の上の柱に懸たり。昼はまれまれとぶらふ人々に心を動し、あるは宮守の翁、里のおのこ共入来りて、いのしゝの稲くひあらし、兎の豆畑にかよふなど、我聞しらぬ農談、日既山の端にかゝれば、夜座静に月を待ては影を伴ひ、燈を

なして閑窓に足をとゞむ。かくいへばとて。ひたふるに
閑寂を好み。山野に跡をかくさむとにはあらず。やゝ
病身人に倦で世をいとひし人に似たり。つらく
年月乃移こし拙き身の科をおもふに。ある時は仕
官懸命の地をうらやみ。一たびは佛籬祖室乃扉に入ら
むとせしも。たどりなき風雲に身をせめ。花鳥に情を
労じて。しばらく生涯乃計ごととさへなれバ。終に無能
無才にして此一筋につながる。楽天ハ五臓の神をやぶり
老杜ハ痩たり。賢愚文質のひとしからざるも。いづれか
幻乃栖ならずやと。おもひ捨て臥しぬ。

先たのむ椎の木もあり夏木立

十八楼記

芭蕉翁

みのゝ國ながら川にのぞんで水楼あり。あるじを加島
氏といふ。稲葉山後にたかく。乱山西にかさなりて
ちかゝらず遠からず。田中の寺ハ杉乃一むらにかくれ
岸にそふ民家ハ竹乃かこみのみどりも深し。曝布
所〻に引はへて。右に渡し船うかぶ。里人乃行かひしげく。
漁村軒をならべて網をひき釣をたるゝおのがさま〴〵
も。たゞ此楼をもてなすに似たり。暮がたき夏の日もわする
ゝ斗。入日乃影も月にかはりて。波にむすぼるゝかゞり
火乃影もやゝちかく。高欄のもとに鵜飼するなど

めざましおのれもなりけらし。かの漣波乃八ツ乃なかの大
西湖乃十の境も涼風一味乃うちにおのれしとゐなかれ
ころ此様に名をいふもむとなるべからず此様とはいふべし
きなりき。

此あたりも同じつれ由来ゆる此流涼し

許六

五老井記

靈泉ある事。水乃そこくゆるかなり。總にて人おほかあらめども。千丈乃魚池にわおもしろきなり。淺く滑くぞある。五老井といふ名をばく別墅となしあて。おもむき庵を結ぶ。五人姓、森若、諸士いたり五老井と名を世とし。淵ちこ。五老は草の別号也。

驛の東不知哉川にそひて多賀の山南に近し。上句乃佐和山をうしろにし、よなよな比良を領する所なり。はるかに瀬田乃残の鐘の陽を坂本に聞しめる人はのわすれし。靈泉を去事汲ぐ、風雅乃名にて。庫の中にとどめむとなし。其外乃清きを受あり。恵山乃泉脉を通し。耳きたるは清別の余泉にひとし。立出る在乃名。自然の茶をさけてしんぼう四時のさ淡をすはずなる。一と世の人ふたたびく泉を汲むものは其をむしし。山鳴の井盤乃細涼。西より人乃柳の陰も。今ここに付そんぬ。甚清を要し廣大にして神佛にいたるまで。すでにはや且蓋の井を摘爲乃おもひをこまで。はれ此所おこぞやかなるし。に何ぞ。

山あるとさて葉山と号して峰よりおちて宮に移して眺むき
きハやわたし。湖水の流ぐ江南江水乃山の姿をすまね侍
伊吹の嶽ハ比良三上乃二ろ根ニ聳をさく。西南乃方ニまき
髪あり。雨ニハ大津の汀をわたり、大江乃名をとゞむ。比
杖を曳てハ、蘇を見て、足を登ニ厳ハ壺をとる事を業
と薪粥を炊く。柿庵ハ緑ニ落ニ粧をすらきて、膝を容
め、賓主二人一夜ニ合せり。兼硯ニ挽ニ筆運のふりこれ
なし。尺ニ指餡をそへ、経路の頭ニ黒の砂を会きし。けれ
とかれしも。庵ニ草亭をあそび、樹ニ未鋏を入ず。おのづから
ものハひらひ、人ハ細を寄て、猶乃風雅をためしを
乃翁ニ住ミ、こゝにも。山樵乃為ニ此しる前、嗚呼皆活
也。文画ニ辞するもの二十余年。子瞻芝瑞をかりとして様
ス。梅花道人が骨骸を纏て、書礼乃その代々の元乃様。自
捨ニ一味の風雅を嗜む。俳世上ニ今が筆の跡を楽てが
が心頭乃花の匂を尽して、風雅ハ是非をあいちい。
西山ハ郷里乃たがひにハ、ふりとなる。いかに風雅の
為ニ文画をそれしと、いふをりなめ。たゞあまりに志を
同じうして、やく五緒をとゞめ、経に樹下ニ
偏にすがりたる、文ニ参ずるものなし。四隅乃筆に序す。
門乃蝶々のまゐて、羨て天ニ機数を数し、かなたの流
ニ睡を洗て、即る。干時元禄五年壬申二月。樵
雲樹林下ニ瀟龍

小篇を書て綴くり是ハ柳の

九華亭記

汶村

○亭あり。九華と名づく。九華ハ何ぞや。抑九華ハ神仙の名也。山に九華あり。丹に九華あり。名あるハ玉像の開る處也。魏の武帝か臺に名づけ、伊氏か宮に名ばく。観あり。殿あり。帳あり。扇あれ。菊に九華の名ありて、茶にも又此美称あれ。上酒人ハ日月を呼て大空九華とし、まさに居る亭乃九華をとりくらふ。建勲ハ九華生とし、荀鶴ハ九華山人と称す。承指の亭、九ろ陽の換数とし、程なる

もとよりきこゆ。菊ハ壮年乃ひとゝみにもあらねど、あらくあらき方をやしなふ乃天地にしたしく。さらに曙の営峰て採かくむしき孤舟に棲まぎれ帆閑すゞしく住しお泳あや先に田のおり鶴芹に敵もれ。萩女郎花も菊細ろしして。菊ハ薫に。花さびしきなれば、江保の遠くをなへ。金花ちる時てぞ。亭外乃風物もなくしくしけど亭ハ古ぬ数。又いくばくぞや。麻風傘味畳一つ。鶴一羽。亭あり。さて此人ハ誰そ。近隣ト。称氏汶村之州にして記をとしるす。

琵琶亭記

許六

○むかし掃部の頭。貞敏といふ人。三面の琵琶を唐土よ
り伝へ来る。我代々に伝りてとゞまれる。楽器おほしといへども
あるは大内にやぶれ。又は田舎にちりて。にわかし美事
乃ことおほし。されば名物一面あらはれて。絃もよくあそぶ人なし。
湖乃絶段も。撥絃ありて。とききかへて関乃蝉丸も勝
せまき挽ばさし込なし。柱に八四乃緒ゝくをそえて。絃
べきよづらひもなく。何ゝ系が枝乃そくいゐもいさつらなる
べし。撥面にハかゝる湖の松と忽ち紀。覆手によハ海四乃も
海手撥といへるハ。二筋乃月を出し。は入江のなみを浮
錦乃細きいと紛ふと。絃声に拵ちあまた花さそふ山風に
ちりかゝる袖をおしみ。鶴鳴濱乃夕ゝ袖に。秋おほくあまる
をかなしむ。あまてゝ猿し。業平てハおさ比。倭時を詩に揚
川に足を折れば。賊る時ゝ三上伊吹に枕をころぶも劇
乃あるし八誰そ。杉原氏にいへるかうハ。これら琵琶
と名はんびし。伯牙がたるべき。鐘子期が耳なくしても
益なし。これをきゝて。誰ぞ。老井の清ハ力を
合せによまかせて記を。聞ど究ちぬ乃琵琶。犬の噢つる
事を。こゝ宝とかるべし。

風薫水亭記

此椿庵の南かに風薫水亭を築く。風ハ涼しさをもよほし
月を寄まるらんなるべし。其の風あきらかに吹ば。あ
香しうして。椿の花を浸し。池の嵐も文に伝てハ。池
ありて荷葉におとそなわ。主人徘徊風に對しく
遊び。酔客書風酔で月をと待。遥く学騒をこらす
ざ稍バかりして居利の惣しきもなし。常に風狸の器盃。
ば屋に於るごとく。風水の二を浄ふなる筆に雲ハ花を餘
酒にあれバ上戸ハ見え。風薫亭に携てあそうやし。下戸
ぎハ水薫亭に眠を催くこうしく風を待ほしくとしえ
あるに。帳中の双角の浄に對しく流ず水陸の戦も
をわざ花と酒の二ハ古めかしき足を込め紀てじる年の跡
く。餘ぬるゝ摘こぶ花。吟おもわしく字に韻に排し紙に
捐しよりし退きどきも人ハ。梅公乃植とかれつく私をこゝまで下
人ハ。撤擦と化して後を撫て紫しむのそ。

○紀行類

五老井 許六撰

鹿嶋紀行

芭蕉

洛乃貞室。須广乃浦の月見にゆきて。松かげや月ハ三五や中納言といひけむ。狂夫のむかしもなつかしきまゝに。此秋鹿嶋乃山乃月見んと。おもひ立事あり。ともなふ人ふたり。ひとりハ浪客乃士。ひとりハ水雲の僧。僧ハからすのごとくなる墨の衣に三衣の袋をえりにうちかけ。出山の尊像を厨子にあがめ入て。うしろに背負ひ。拄杖ひきならして。無門乃関もさハるものなく。あめつちに独歩していでぬ。今ひとりハ僧にもあらず。

俗にもあらざる風の名に。声をかりぬかみちなきに流
れも流つきぬ暮て。門には松に宋て。紅葉とにほす
「まらば。船をあがれば。馬にものらぬぞ。細腰(カツヤ)乃ちらちらする
さむとおもふ。甲斐(カヒ)国におもむく人の。いとさびしさを見る。
携手ゆゑばくまる筆をもちおくいでおもむく。
やたらと又里をすぐればかまがいの原といふところにゆき
あれど秦甸(シンデン)乃一千里とや目もくるゝ見るこころさへ。
はじめむむふよころぐ。二十帯なるびきて里。かの屏風の
双剣(サウケン)乃峯あれど是へしは。序山乃一隅なり。雲に
やさびしきむらさき乃いてども。我門人嵐竹が句
なるまじくいはさびて。因果(ヤクヒ)巫蔵(シチノミコト)みちきをはまくるし。

連歌する人乃いへども名づけたれば。和歌なくて
あるべからぞ。白なくてさるべからぞ。漢の武もすへよむ安
なれたらし。宗祇も錦を地よ志をしんでそ。為仲
が古種に折入て。旅の古巣(ツト)に持をさすると。風流めく
かうぞ。きこえからをさなへしかる也。尾花も神合て
小男鹿乃つまよぶ声。いとあはれ也。野の駒。不知
ぐれよむ神あめく。又あれ神世。因すれに菅かくる稲に。
利根(トネ)川乃かゝる橋さしいふ不知はたく。此川にて鮭(サケ)の
網代(アジロ)といふことあるをきくこそ。武江の市よひさく者あれ。
宵乃月じ。その漁家に入て。やまらふ。夜(ヨル)明ち宿(ヤド)ながし
月も雨なく晴まるよ。思ひ船さし下して。鹿沼に

にまう序。是よりわ西吉野につゞく路くゞりて入へくもあらじを
藤原よ根本寺乃さきの和尚山にいて世をのがれてや山によ
おりしかるといふをきゝて。序に入て拂しぬをこふ所
人をす。七源(シンゼイ)着を發(ハツ)しむとも時しまむ。いづくより
清浄だる心を好るに似たりわ。暁乃空いさゝか晴ぬる
和尚おもたりし鶴ほどにべ。人くおどろかぬ。月の光西乃
まどさしてあかく穂なるやりしきのとびまよみちてげふ亡
みなが葉にかりしろくしと風又よ来申ぐるがおるまよ
ならぬがおさなる穂とが何しも乃女ずし。附為に
仰ぶ作のかしまて。うとはづしもきえに先ハより
荷擔(カタギ)乃人ならむし。

〽まだやし楢ちて鳥を拾なりけり　翁

〽雨に寝く作しおきこる月見かな　重辰

南行ノ紀

李由

許六

○鳶ハ遠く生れ給ふげる。降るも日かりん時にあなし。是に
あるにまかり世。雨を去のぐ杣子。着義ハ安穂とど。今根本
合羽(カツパ)で住四(ダ)子の後を入きられハ学に籍一ときて。天晴(アツパレ)拙人
乃出家くわ来ぬ。二月晦日といふ日に。蛇井部家を離
まど名吉(ナヨシ)ち書日一つをよう穂おく。西づゝの柳。おかれを記
まど寝の雑子乃うち皆早し。揺乃心まへなすわきうとすわ。旅迷

諸道しとはの花をかう流うし。首よりけうる流域。
月うき秀しれお果し布施。布し山乃山中ふ道づまさとせぬと
見まばかんる神ある聖なりわ。男是ふわ。角文字や
乃世何の。好やちやとけつ神。やがて出の池ふはくよ
ゆる着小風呂お河室ふ河をうけし。聖あ神の使よ
不と若ハあら湯を積気湯旧ふわハ湯出の都はを定ぬ
将且くの事を見よ記さじ。花も湯出あつまりて四を
べしとて。書記も湯出こと男よ頂しぬ
聖 ればハ法性。粒は。湯出お男ぬうしじと起て行べき五八
も法。例の一夜をとと勤まる神ハ。聖て乱て能要
ね。天氣よろ政治乃まりあへさつるを明らて。並木お床
保まりうたりうる。を近くの筐乃回。を訪しるとしても
移康山跡むしとて。聖なる善見。男ある。
聖 天井ま首ハはらしく山さうり
男 伊勢ハ本馬士の移康や花田さ
下る坂。山あひくうつる嶺の中ふ坂池乃地ま径なく
ちらるもそそれ。
聖 嵩ても竹尾ども回り地 野あし
男 嵩さまりそハ。関の乾花うそつれうなれ。茶店をもとこし
ますそらくあまてとハゞうを勝をうけそられ。
男 回りそやあふのくにまなくてうる者
たそふ徳なる法。すでは法くちゑぐ。宿おお葉囲もおばけうなし

二日。暁ふかく起きて。供なる男を起こし。婦女ともにおきて
桃の杖に。金剛杖をひきさげる。旅姿桃の杖の影
四つしさしてしぎふつき。そへて。わづか周りぶかく指す。さ
かやがてもかくらにして供にして。まだ遠し。極乃事しき
つれぞれは。おもしろき。鶏をききて。弥のまぬ。明りなし
あめつきて。笠は堂よりいでて。おぼつかなげに宿の。おぼれ
宿並は。あし川はかりへつ。たどたどの鶏の声。夜もあけて。並木中
をとめけて。火縄の火も遠くなりて。しらしらとくれなる。絶ゆ
毎に。漫庭均（テイキン）が早り行もやあやぬまはいに遊びて渡る石よ
して。雲津川の仮橋を渡る。かくて。六どの京宿御の
日よう六千。松坂乃矢川とひろく。人の西の白かくちかひ名

まる原さる前ノ辺へべ。今は経て出ちの雨またわきまへて以
鏡が飢（アサツ）。江口。神崎やくじむし絶てともおかしぬるみぎ
の子ちの渕々。今子ち矢川となりて人々のいて家ちの名まねまたぞ。
橋茶（ゴマ）の松ふ。ひかりを帽のむらがりて京（オウリ）殿茶鶏（ソウゲ）まん
謹てこ。道よ風に顔く。今はまた先よろき香もなし。

松坂や雑俳とへて洗らさらる　男

出女乃臭もむらと浅く。鳴鯉も　女

宮川乃塔と。紬く代垢離（ゴリ）の子たちは。幡乃人ノごとく。
御織（オセン）判（ゾウリ）の挟（ハサミ）や。解（カ）餐て。仰られ。

醤油の橋より出る。柳しれ　女

山田に入る。何からも先の行をわかれば。日方の若かれば。案内者

みな　て出られ
神神おゝ宿くめ給ば、よろ川のす、思ひます、
ろうしきうけ乃へすしお旅八おさしらせ候

奉納二句

青海苔も和らかんの藤乃かひ川ト　男
松櫻川と隔て～　墨乃袖　女

天乃岩戸に入まば灯ばかりてやうし、ぢ盆乃ひ～き
神と称まるかぎりなし

究竟と天袴へおそ給し雑子参　男
殿寄に詣て、御社ちりにけ松乃ひ～立み出、雲羅川ら
さらにおゝ神、御嶽おへちんしとしてかちのよ～殿

了南しな法はるけんもまでへあわて又上歩き
嵐乃松風為ゝへここ～さやか、小袖の麝香にさりわぬるしも
いましきん給せる袖、おちわ、よ気持さとやおまおもと
さらすれなれわ、又奉納。

百八乃なかゝ乃かゝ法藤かれ　女
今そ去る月旧の花も法さる～　男

つきをぬ法名跡も音々し及つざすて小太郎ゆるく
おそらわ、二見の方もゆうし名袖ど、終ろさんへそろ～と
谷すへ参りまうて、御乃大事の拜よ陣まてる侍

序

〇序類

五老井許六選

曠野集序

芭蕉

尾陽蓬左。橿木堂主人荷兮子集を編て名をあら野といふ。何ゆへに此名あることをしらず。予はるかにおもふに
◆ひとゝせ此郷に旅寝せしをり〳〵の云捨あつめて冬の日といふ。其日影相續て。春の日また世にかゞやかす。げにや衣更着やよひの空のけしき。柳桜の錦をあらそひ。蝶鳥のおのがさま〳〵なる風情につきて。聊實をそこなふものもあればにや。[illegible]乃心とくれかたん乃[illegible]あるゝなれば。ふみわけて姫ゆり乃なでしこもつくれ。

曠野集序　芭蕉
猿蓑序　其角
甚拼後園序　支考
近江八景序　千那
四絶文章序　李由
要文集序　許六
画樓繪合序　許六
麻生後序　許六
銀河序　芭蕉
番椒序　野坡

ちゞ俳諧のおほむねにかなへれまして、前集のきはまりある道芝の
まちふみつべきひとしく、此野の原にも時を待べし

元禄二年 除生書

猿蓑序

其角

㊀誹諧の集つくる事、古今にわたりて、此道のおもて起
べき時なれや。幻術の第一として、その句に魂の入ざれば、
ゆめにゆめみるに似たるべし。久しく世にとゞまり、長く人に
うつりて、不変の変をしらしむ。五徳はいふに及ばず、心を
こらすべきたしなみなり。彼西行上人の、骨にて人を作
りたてゝ、声はわれたる笛を吹やうになん侍ると申され
ける。人には成て侍れども、五の声のわかれざるは、反魂の
法のおろそかに侍るにや。さればたましひの入たらば、アイ
ウエヲよくひゞきて、いかならん吟声も出ぬべし。只誹
諧に魂の入たらむにこそとて、我翁行脚のころ、伊賀越
しける山中にて、猿に小蓑を着せて、誹諧の神を
入たまひければ、たちまち断腸のおもひを叫びけむ。
あだに懼るべき幻術なり。これを元として此集を撰
みて、猿蓑とは名づけ申されける。是が序もその心を
とりて、魂を合せて、去来・凡兆のほしげなるにまかせ
て序す。

蔓柳挿園序

丈考

○世にあそぶ人ありて。猿猴錦繡にきせのしふ渕を楽しみて
浮をおもしろのほし。此柳樹下にあそぶと於ふ心にも
さ神ハゞ世ようしやむつかしも。わきねへしじぬらし川乃さうげ
みしぶるをおもとんに天遊ありとぞ。むかし於ゝ人もいつはりを
さ挿バ柳は宝を何らし。而乃友生をあらて。何をさふ
そ見おもるぞ。額には園乃一字を選して。其竹のたしなみ附あ
様になしや。ゆかしき時なさりさぬにかさて。う於時の心は
後ひ於りをたま小の彩つく侍んにや。待つともむ。此見にもおも挿ま
せ中にあそび人々潤のなむしと僕しきるにんし
あをとらんげの余情をいふ人々べ。罸ハ金谷の酒はにかゝ
○のうむ誹諧に輩し入ゝ衆時あく。此にわとゝのうきおしそ
心をおさせむとてそらふ御筆をまる。

近江八景序

千那

○近江八景ハ。湖水の絶景をあつむ。昔唐國に於ゝ華
石山にはつらなる。叡岳は章譜をつん泊し。勢田夫稀を
今をも瀟湘乃八景よなぞらへ。八乃其を定む。そ於ゆりを
水漾より中堅の月に至し。近濤乃磯家に。石
山寺にあそぶ時。ぞうしえて此景を詠を。すべて数お
あくの八景。三井寺晩山おち十境詠をんというなし。

八乃端番にあるこゝろまと。俳諧の八景あるやうをしるす。

自他を境乃心を集くすぞ近江八景の一軸とならけ

坊の［illegible］筆を［illegible］東軒にて序。

四絶文章序

李由

四 謝氏か五十井に四絶あり。絶ハ絶勝の義なるへし。一には快雪亭。二には揚揮亭。三には花園。四は

[illegible]

賤きよ名づけて先生之乃為よてるべし先六の事にある
まつも附よかりしを夢有まふわてば落名を天へとしかて法衣
と改名して、やゝそらしきぬ。書子ふふく口形しなとらい
此世の業は是非なし。世失て来世よ生れし時は善悪
まけきさふべとひへども、法師かしら俗ねまて、ふ法名ハむつきく
いまハあらぞ。今六の当世当秋ハ、是非なしとぞ俗よ法学
なして語つもぬ。今予が四絶も、かくあらしとおのく
この秋を感じて、説。賊。銘。賛乃四文を書して給り
予其志をよくし。其書中一秋よ一章をとらべし。おそらく
予が絶となしくんずと知べく。やがて此文章乃始よ序し
てまへをのべくば罪を免がるしのみ。

要文集序

許六

○逢坂山乃杉よ雲井ふ雑ども、法師絶くと鶉が一淀の
里ぞわ弘夜小河小ぞなりきなくとも鳴きる鹿子の宮わ
くよぞのゝ一夢のおよがりわくる孝声もきつあ島え
かあくとめ善一権のちいしと同しき鶉さよ餘を
やあわき無ぞなるとんば法も猪よしもちて、かあくちいく
よわらが揃きわくる新つなまちおりしられくを新つき
そもも同しき文わ鶉るふイヤヲッハくし所記し乃
かりわあやあ予まむりしくぞ女まを文る。わいつしまえ
鶉鵡とやふ雪ハ人の以ふ予そよく其細まる。ば使よ滅を

てふ利純をは学ひけり。父母。師。口與をよくぞまきてかへれば
かるは思ふよみも我れば。世の中の紙つゝ味なくらぞ。かまへしに歌を
見とりしるとしゆふぞ。父母乃恩つまするも悲つとしもなく
此世を流るるの走似を承絶とし。一生飢饉よ年々
ちふさる悲つ事もなし。ぞさてさらししかりしも哀ふかれ
きる於ば原に。あるかなんかの塵を八百。之れをも絶の
宮上とおほして学びよまする世は古きは緒の文集
とぞ申侍める。

画楼絵合序

許六

○和哥乃いにしへ、絵かく人の中に良秀に家を焼て不動尊
乃焔をよろこびあるは他の国に類きし、漢土の善てん人を
画に求る乃名を残せる人もあまたなり。当世の風情にあつかひ
まぬかれし布袋。福禄寿の二筆をおほして西川(祐信)の画
乃一列に入。其子となりて浮世絵をうけて人窓を
あしへり。次に学術をきはめ。画工乃思ふく人々。楼を造りて
人を楽しむ。起て思ひれ。学びく思はれ。おのが精神をも画とせ。
猫を思ひれて鼠を絶をもむべきなるか。是絵画楼を造
らしめ。画を久しくさまざま流れ斬老者よつまきて絵事を
見る日稀也。一とせの中。暑寒の二季は、墨膠
こりきて思ふく日なし。春秋の二月にも。水凍筆かじ
きて思ふく日なし。是を一とせみな月乃楽筆とさるむ。

抔雷雨風害ハ、心乃様ならず。又云れのいと思をおんみな
花を翫しハ、此を戯まで。有を嗅よ。雪を吟じせて又
思ひ日もくれし。岸に臨し湊の日あけしく思ふと
扉をうけし。あるを汲河例の新宮入らるしあるら
曲終へ酒飲、炭火まかつてはく、果ら花将が世字
しよお果そく。此年の夜擬らを画像を造るがおやき
さ宣ま幾なぞあの縁ら。菊等雪の芳乃らくきを枕
く。小ゝ書林あわずはらく像乃自らずはねを研く
こうれ。入事て縁をぬひ時き八先て一作あれ。其をつ
ら。云食乃暁を期とし紛して畑る。次の日来て、ちや
生て乃罪を表し。年か議ありまし人一生思ひくおと

去る人ども。一生二生て乃罪をうまれ。前去も何く縁ありゆく
我は随ずとも一世にしと云ども懐人は入へくやし。二三十年まで良
ある年めせぬ年経る何ぞ。七十年乃月日也。すなはち成就乃
時節と申すべし。探り微く内すなはち六人へ跡を探て、不
動山水花鳥をうつし。香一軸を懐にしてただ太古に列なる。
まで子携へを筆にしば挽にまかせ門人まく取りたまふ。
二術を画一様乃繪合と以て、様てなせ并に許すに六自
扉作川くくふまる。鄭云が標叔として老画師と
称するの。于時元禄六年のち十一月日書之。

麻生ノ序

許六

麻生乃名を。烏帽子折といひしゆゑ。ぬはよあふ烏帽子とぞいひし。一の秋なるべし。すべて世をぬ嫌ひ乃二千り流もおく。天地まる此乃さがひともなり給ひし妹といふ人。此乃ぬ。あまりハなかりともゆかりの紀ろとしの嫁家擬座ハ。其の雅がの中しをぬすむ。情盛での戦ふ寂(莫)法師の掛乃夕暮ハ。世を厭ハしるはるへし。地と只む。桃源よきハすれ。翁を思出鶴をすかれハ世も桃をもの浴法よ及べし。晋子が傾城よ。阿山人が出女ちぐ。餞夕小して。名残の柿乃ぶ。日の字およびて未(末)椿もも乃つ字も同じ。カキクケコよ外れ一る病人ぶ赤いそしれ乃あまよハ。ぬよ示烏帽子のおん不を発明しよはぎ。被ハ拵老の泥字よし。柳行国の一人る輩ハ。柿乃あちる示をとも。此集よおさめ迎ふべし。也よ俳諧大義士跡を。

銀河序

芭蕉

北陸道に行脚して。越後の国出雲崎といふ所に泊る。彼佐渡がしまは。海の面十八里。滄波を隔て。東西三十五里に。よこおりふしたり。峯の嶮難。谷の隈々まで。さすがに手にとるばかり。あざやかに見わたさる。

むべ此嶋は。黄金多く出て。あまねく世の宝となれ
ば。限りなき目出度嶋にて侍るを。大罪朝敵のたぐ
ひ。遠流せらるゝによりて。たゞおそろしき名の聞え
あるも。本意なき事に思ひて。窓押開きて。暫時
の旅愁をいたはらむとするほど。日既に海に沈で。
月ほのくらく。銀河半天にかゝりて。星きら〳〵と
冴たるに。沖のかたより。波の音しば〳〵はこびて。
魂けづるがごとく。腸(ハラワタ)ちぎれて。そゞろに
かなしびきたれば。草の枕も定らず。墨の袂なに
ゆゑとはなくて。しぼるばかりになむ侍る。

あら海や佐渡に横たふあまの川

番椒辞　　野坡

たうがらしの名を。南蛮がらしといへるは。世に南
蛮より入しかりしゆへにや。未詳。[illegible]子。天ノ鳳定えん
八(ヤツ)なりにぞいつるも。あのがかすちをぬめ出して。八つの嶽
びくれするなるべし。皆やさしうしぬ名目ハ。海が串潟(ムシレツキ)
乃ふくさ神が。天資り出の枕ざらしうむべくりま
かまぼこそうなや。石墨によろしく杉く。竹輪の網乃
くさよあるハ。上ておるゝ仕合なれど。とすれバ雷鉢(スリバチ)の上にて。底
わきに羅(ジンベ)に焙(ツチカ)まで。世様乃そづま。二階のつまよ。袖ひしき
見ほどきの。ゆ侍るし。あやうくも侍るを。胡[illegible]のくるき

第0191 3.14

白岩源五郎主

きらひなハ誰もしおもハず。然るをかづら鯨つき鯨乃香
脇よかしづき出て。鬢の口味うつりみされとなりし
不食せず事おぼ附。ふ器これむさき就。お門くハ奴僕豆腐の
膝おぼなるの事をうえけるを。菜も乃最上としたりて。かくハ人
どもある人小町道の悟る時よ。た乃色おゝ小宿よふたる一
曲られて。めづらしきとひとかみのかし。ゆ。雨やきしう
あつとこゑへぞ。此中し来らるべよまもあらが志らしし今ハ
なき人となりぬ。世をさうてつりしバ。よし悲しさもれゆべう。
ぞ。かくて月ころ経べりしを。小序をとふるのみ。
石墨を絶て根てあや当撒